

2015. 6. 11 (木)

「つながり」を求めて行動する

長 松 奈美江

自分で「自分の役割」を定義する

今週のチャペルのテーマは「世界と出会う」なので、今日は私が出会った世界についてお話ししたいと思います。私は関西学院のランパス留学基金を得て、2013年4月から2015年3月まで在外研究に行ってきました。アメリカのコネル大学で1年9カ月、その後イギリスのオックスフォード大学で3カ月の時間を過ごしました。この2年間でいろいろなことがありました。きっとこれまでの人生の中でも、これからの人生の中でも、忘れ難い2年間だったと今でも思います。この2年間で、アメリカやイギリスでいろいろな人と出会いました。しかしそれだけではなく、新しい自分というものにも出会ったような気がします。

この2年間で、いくつか印象的だったことをお話ししたいと思います。先ほど『マタイによる福音書』の7章7～8節を読んただきましたが、私の2年間というのは、この言葉がいつも心の中をよぎっていたような気がします。日本にいと、私にはいろいろな役割があります。私は大学で働いていますので、日々、教育をしたり、研究をしたり、大学のいろいろな仕事をしています。しかし、この2年間というのは、この役割が

ら離れてとても自由でした。学生の皆さんも自由なのではないかと思いますが、自由であるということは、いろいろなことができ、とてもすてきなことです。

でも一方で、社会学では『自由からの逃走』という本がありますように、自由であることはとても苦しいことだと思います。私も、最初は役割がないし、誰も私のことを知らないという中で、不安で、とても孤独な日々を過ごしました。

しかし、ある期間を過ぎて、英語にも慣れてくると「待っているだけでは駄目だ」と考えるようになりました。どのように考えたかという、自分が「何をしたいか」、「何を知りたいのか」ということをまず明確にして、そのために、いろいろ行動するということです。「求めたら与えられる」ということを、実際の行動に移してみようと思ったわけです。そうすると、誰かから「与えられた役割」ではなく、おのずと自分で定義する「自分の役割」というものが明確になってきます。そのように気持ちを切り替えると、アメリカやイギリスでの生活がとても楽しくなりました。

体験や気持ちを共有する コミュニティとしての教会

私は、アメリカのニューヨーク州にあるイサカという小さな町に住んでいました。そこで教会に行ってきました。ランバス宣教師はメソジスト系ですので、そのつながりを求めて、自分で、インターネットでイサカのメソジスト系の教会を探して連絡を取り、礼拝に参加してみました。「フォレスト・ホーム・チャペル (Forest Home Chapel)」という、とてもかわいらしい、100年ぐらいの歴史のある教会でした。建物もかわいらしいのですが、教会に来ている人たちもとてもチャームングで、温かい気持ちで受け入れてもらいました。このことも、私の2年間のうちの貴重な思い出の一つです。

そこで、教会や礼拝の時間というものは、人々がさまざまな体験や気持ちを共有する場なのだと感じました。フォレスト・ホーム・チャペルの礼拝では、礼拝が始まる前にみんなが立って、名前を言って握手をし、挨拶をして回ります。基本的に礼拝の進め方は関学のチャペルの時間と一緒に、牧師の方が聖書にちなんだお話をされます。でもその後に、礼拝に参加した人たちが自分の身の回りに起こったことを話して、共有し合うということをするのです。どのようなことを共有するかというと、楽しかったこと、良かったこともあれば、一方で、悲しいこと、心を痛めていることもありました。例えば、良いことは子供が大学に進学したこととか、一方、悪いことは家族が病気であることとか、いろいろなことをみんなで共有します。うれしいことは、みんなで祝福し合い、悲しいことは、みんなで心を痛めて祈りをささげるというわけ

です。この礼拝に参加して、コミュニティという言葉をもっと実感することができました。

「つながり」はどこでも見つけられる

私の専門は労働社会学なので、全米各地で開催される労働関係のカンファレンスやセミナーに出かけていきました。そこでもやはり、コミュニティというものがとても大事にされていると感じました。同じ社会で生きる人たちが、悩みや迫害されている状況を共有し合い、そのために何かアクションを起こすということがされているのだと学びました。

学問以外にも、いろいろな所に行きました。イサカ市はニューヨーク州にあります。皆さんがご存知の大都市、ニューヨーク市まではバスで5時間かかります。ちょっと遠いのですが、刺激を求めてというか、ニューヨーク市にもたびたび出かけました。そこで印象的だったことの一つとして、ランゲージ・エクスチェンジ (Language Exchange) というイベントに参加したことがあります。ニューヨーク市に住む人たちの中には、母国語とは違う言葉を勉強している人がいます。私だと英語を勉強しています。そうすると英語をしゃべる人と話したいですね。一方で、アメリカ人や他の国の人たちの中には、日本語を勉強したいという人がいます。そのような人たちと日本語と英語を交換するということです。ランゲージ・エクスチェンジのイベントに参加して、日本語を勉強する人たちに出会ったり、他の言語を勉強する人たちに出会いました。

アメリカにはたくさんの方がいて、人種が違ったり、収入も違ったり、いろいろな人が

います。しかし、異質性の中にも探せばどこかに同質なものがあり、言い換えると「つながれるもの」があるのだと思いました。例えば、ランゲージ・エクステンジのイベントで、韓国語を勉強する黒人の人に会いました。その人は南米から来た人なのですが、異なる言語を勉強したい、そのために人とつながりたいと思ってこのイベントに参加していました。すると、人種や職業など、異なる部分がたくさんある人たちの中にも、どこかにつながりが得られるのだなと思いました。

このような経験をして実感したことは、「つながろうと思ったら、どこでも、誰とでもつながれるのだ」ということです。日本のことを考えると、確かに日本人はシャイで、なかなかつながるといことが苦手です。でも日本でも、同じようにコミュニティというもの形成して、人とつながれる機会というのは無数にあるのだということを、あらため

て思いました。例えば、このチャペルの時間に来ている皆さんも、何かにつながりたい、誰かとつながりたい、この場を共有したいという、そのような思いを持ってここに来ているのではないかと思います。

もう少し広く考えると、大学というのも、いろいろな人たちと、ちょっとしたつながりを求めて行動できる場だと思います。私は2年間とても楽しかったのですが、関学に戻ってこられて良かったとも思います。帰ってきて、いろいろな人とまた新しいつながりを得ることができ、学生さんや同僚の先生、友人などと、あらためていろいろな話ができることが、今はとても楽しいです。皆さんもぜひ、この大学で得られるつながりや、これまでで得てきたつながりを大事にしてほしいと思います。

(社会学部准教授)